宗片先生、ありがとう
Thank You, MUNAKATA-sensei

田中　清行
TANAKA Kiyoyuki

「幽玄だな」と思った。この秋、『不来子先生』を見て、仄聞していたが能とは幽界であり、幽玄だと思った。

過去に数多くはない能楽歴ではあるが、初めて片時も退屈に思うことがなかった。

還暦過ぎの目と頭が子供のそれのように集中し、白い足袋の運びも、含みのある能面も、優雅な踊りも自然に凝視していた。笛が鼓が、地謡が尺八が、「なるほどな」と耳に入った。ソロー、シェイクスピア、ロンドン、ア マン フー ダズノット カム、リンカーン等のカタカナ混じりのセリフも、心地よい違和感であった。

橋本治著の『小林秀雄の恵み』に感銘を受け、引きずられるように『無常という事』を読みかけていたのだが、中に偶然にも『当麻』という随筆がある。戦前、梅若万三郎の当麻を見た小林秀雄が冷静に、かつ激しく感応している。

「中将姫は未だ眼の前を舞っている様子であった」「自分は信じているのか、世阿弥という人物を、世阿弥という詩魂を」と嘯く。

その短文は中将姫（精霊）をブライス（精霊）に置き換えて読むこともでき、そうすることで共に往還しながら、『不来子先生』の残像は一層深く刻まれた。

小林がルソーの『懺悔録』を否定的に引用すれば、宗片（ブライス）はソローの『森の生活』で、共に頭デッカチの近代文明を揶揄する。世阿弥（小林）の「美しい花がある。花の美しさという様なものはない」には、松尾芭蕉（宗片）の「古池や 蛙飛び込む 水の音」が呼応する。

蛇足だが、ブライスと小林は同じ鎌倉の東慶寺の墓地に眠っている。

宗片先生に初めてお会いしたのは十年以上前のことだ。出版社三五館の星山佳須也社長に連れられて、宗片先生宅を訪ねた。熱海の海が一望できる高台の立派なマンションに破顔一笑で迎えてくださったことを覚えている。

その後は宗片先生の詩魂こもる原稿に先導されるようにささやかに編集し、二〇一〇年五月、『ブライズ先生、ありがとう』は公刊された。本文からはブライスの生涯全二句の日本語の俳句を。二十代の「葉隠れに 青い夢見る かたつむり」。そして晩年の「山茶花に 心残して 旅出かな」。

爾来、宗片先生は折を見ては能にお招きくださった。能を見るのは（たぶん）、その時だけだった。

それでも宗片先生の気長なご薫陶のお陰だろう。無粋で非才な私でも、伝統的な幽玄美を、ほんの少し分かりかけ始めている。

「宗片先生、ありがとうございます」。　**（編集者）**